

資料

コロナ禍におけるA大学の低学年学生の 進路選択セルフ・エフィカシー

楠奥繁則¹⁾・神藤貴昭²⁾・加野佑弥³⁾・藤澤珠織⁴⁾・徳田昭雄⁵⁾・三宅章介⁶⁾

1) 青森中央学院大学経営法学部

2) 立命館大学大学院教職研究科

3) 立命館大学大学院政策科学研究科博士後期課程

4) 青森中央学院大学看護学部

5) 立命館大学経営学部

6) 名古屋産業大学現代ビジネス学部

Career Decision-Making Self-Efficacy of Freshmen and Sophomores at "A" University during the COVID-19 Pandemic

Shigenori KUSUOKU¹⁾ Takaaki SHINTO²⁾ Yuya KANO³⁾ Shiori FUJISAWA⁴⁾ Akio TOKUDA⁵⁾ Akiyuki MIYAKE⁶⁾

1) Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University

2) Graduate School of Professional Teacher Education, Ritsumeikan University

3) Graduate School of Policy and Science, Ritsumeikan University

4) Faculty of Nursing, Aomori Chuo Gakuin University

5) Faculty of Business Administration, Ritsumeikan University

6) Faculty of Current Business, Nagoya Sangyo University

資料

コロナ禍における A 大学の低学年学生の 進路選択セルフ・エフィカシー

楠奥繁則¹⁾・神藤貴昭²⁾・加野佑弥³⁾・藤澤珠織⁴⁾・徳田昭雄⁵⁾・三宅章介⁶⁾

1) 青森中央学院大学経営法学部

2) 立命館大学大学院教職研究科

3) 立命館大学大学院政策科学研究科博士後期課程

4) 青森中央学院大学看護学部

5) 立命館大学経営学部

6) 名古屋産業大学現代ビジネス学部

要約：本稿では、コロナ禍における A 大学の大学 1・2 年生（大学生低学年）の進路選択セルフ・エフィカシーについて議論する。パネル調査の結果、次の 2 つのことが示された。(1) COVID-19 によってもたらされた雇用状況に対する不安は、大学 1・2 年生の進路選択セルフ・エフィカシーの向上を阻害している。(2) 雇用状況の悪化の下でも、大学 1・2 年生の女子学生の進路選択セルフ・エフィカシーは高まっていることが示唆された。

(キーワード：進路選択セルフ・エフィカシー，雇用状況に対する不安，大学 1 年生，大学 2 年生)

Career Decision-Making Self-Efficacy of Freshmen and Sophomores at "A" University during the COVID-19 Pandemic

Shigenori KUSUOKU¹⁾ Takaaki SHINTO²⁾ Yuya KANO³⁾ Shiori FUJISAWA⁴⁾ Akio TOKUDA⁵⁾ Akiyuki MIYAKE⁶⁾

1) Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University

2) Graduate School of Professional Teacher Education, Ritsumeikan University

3) Graduate School of Policy and Science, Ritsumeikan University

4) Faculty of Nursing, Aomori Chuo Gakuin University

5) Faculty of Business Administration, Ritsumeikan University

6) Faculty of Current Business, Nagoya Sangyo University

Abstract: We discuss career decision-making self-efficacy (CDMSE) of freshmen and sophomores during the COVID-19 Pandemic. A panel survey with questionnaires (two-way ANOVA with replications) was conducted. The following two results were indicated: (1) the anticipation of a downward trend in employment during the COVID-19 Pandemic is preventing freshmen and sophomores from increasing CDMSE, (2) in spite of the downward trend, first year and second year female students have increased CDMSE.

(Keywords: career decision-making self-efficacy, anticipation of downward trend in employment, freshmen, sophomores)

1. 問題と目的

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行は、わが国の雇用状況にも負の影響を及ぼしている。例えば、一部の旅行会社や鉄道会社では、2022 年新卒採用を見送ることを発表している^{注1)}。また、厚生労働省によると、労働者の解雇や雇い止めを行っている企業もあり、10 万人以上の者 (2021 年 4 月 7 日時点で 10 万 425 人) が「コロナ解雇」されている^{注2)}。病院においても、日本

病院会、全日本病院協会、日本医療法人協会は、2020 年 4 月に 69.4%、2020 年 5 月は 62.8%、2020 年 6 月については 67.7% の病院が赤字であったことを報告している^{注3)}。そのことから、今後、新卒採用を見送る病院も数多く出てくるかもしれない。

このような報道は、大学生に「今後しばらく企業や病院等の求人数が減少するのではないか不安である」といった雇用状況に対する不安 (以下、雇用不安) をもたらすことが予期される^{注4)}。

雇用不安は、就職活動を開始している大学3年生や4年生に「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶことができないかもしれない」などと思わせてしまうと考えられるので、彼・彼女らの進路選択行動に負の影響を及ぼすことも予想される。

一方で、就職活動前の1, 2年生(低学年学生)についてはどうであろうか。後述する、進路選択行動の活発性に影響を及ぼす Career Decision-Making Self-Efficacy (進路選択の意思決定の効力を表す概念; 以下, CDMSE)¹⁾は学年の推移に伴い変容することが示唆されており²⁾, とりわけ、就職活動の前後での大きな変化が予測されている³⁾。そのため、就職活動前の低学年学生と高学年学生では雇用不安がもたらす CDMSE への影響の程度も異なるであろう。そこで、本稿では低学年学生に焦点を当て、コロナ禍における彼・彼女らの CDMSE について議論する。

1.1 雇用状況に対する不安と進路選択セルフ・エフィカシー

先述した CDMSE は、わが国では「進路選択セルフ・エフィカシー」⁴⁾などと邦訳されている。CDMSE はモチベーション理論の「期待＝価値理論」(我々のモチベーションは期待によって調整されるという考え方⁵⁾)に位置づけられる Bandura⁶⁾のセルフ・エフィカシー理論^{註5)}に基づいた概念である。よって、CDMSE が高い者ほど、進路選択行動を活発にとり、逆に、CDMSE が低い者は進路選択行動を避ける、あるいは、不十分な活動に終了してしまうと考えられている^{1) 7) 8)}。

CDMSE の背景にあるセルフ・エフィカシーに影響を及ぼす情報源には次の4つがある^{5) 6)}。

第1に、遂行行動の達成である。これは実際にその不馴れな行動を遂行し、「私はやればできそう」と感じることができる成功体験を獲得することである。

第2に、言語的説得である。他者からの励ましという言葉や、自分自身による自己暗示といった言語的な説得を通して、「私はやればできそう」と感じることである。

第3に、モデリング(代理的経験、観察学習)で、これはお手本の行動を観察し、「私もそのお手本のように遂行すれば、やればできそう」と感じることである。

第4に、情動的喚起(physiological and emotional states)である。これは、セルフ・エフィカシーはその時の生理的・感情的状態にも影響を受けることを意味する⁹⁾。例えば、不安や恐怖を感じている時は「私はやってもできそうにない」と感じやすくなる。この場合、「私はやればできそう」と感じることができるようになるには、その不安や恐怖の原因となるストレスを取り除き、リラックスできていると感じることが重要となる。

4つの情報源を基に考えると、上述した雇用不安は、学生に「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶことができないかもしれない」「自分の望むライフスタイルにあった職業を探すことができないかもしれない」といった不安な気持ちをかきたてると考えられる(情動的喚起)。つまり、雇用不安は学生の CDMSE を下げると考えられる。そこで、本稿では、まず、調査1「雇用不安を感じている低学年学生の CDMSE は、雇用不安を感じていない者と比較して低いのか」と、調査2「雇用不安が低学年学生の CDMSE を低下させるのか」について確かめる。

1.2 学修・生活から見たわが国の女子学生の特徴

加えて、COVID-19の流行によって、女性が職を得やすい産業の雇用悪化が指摘されており、そのため、女子学生が脆弱な状況に置かれやすくなっていると考えられている⁹⁾。たしかに、この雇用悪化というストレスは、特に女子学生に「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶことができないかもしれない」などの不安をもたらしているであろう。前述した情動的喚起の視点から考えると、彼女らの CDMSE は低くなっていると考えられる。

だが一方、わが国の女子学生は地道に努力を重ねる、真面目のイメージがあると言われている¹⁰⁾¹¹⁾。例えば『第1回大学生の学習・生活実態調査報告書[2008年]』によると、女子学生は、男子学

生と比較し、目の前の授業や、堅実な資格取得に真面目に取り組む傾向があることが報告されている(「表 3-1-5 授業への取り組み(全体・性別)」, p.88)¹²⁾。この傾向を考慮すると、就職活動開始までの時間に余裕を持つ低学年女子学生の場合、既に「自分の興味・能力に合うと思われる職業は何か」「もし望んでいた職業に就けなかった場合、どのようにして対処すればよいのか」などの問いについての回答を導こうと努力を重ねていると考えられる。そして、低学年女子学生は、低学年男子学生とは異なり、いくつかの回答を導いた状態であることも推測される(遂行行動の達成)。

以上を踏まえ、本稿では、調査 3「低学年女子学生の CDMSE は、低学年男子学生の CDMSE と比較して高いのか」についても確かめる。

1.3 本稿の目的

本稿の目的は、COVID-19 の流行がもたらした雇用不安が大学生低学年の CDMSE に及ぼす影響について調査することである。具体的に述べると、調査 1「雇用不安を感じている低学年学生の CDMSE は、雇用不安を感じていない者と比較して低いのか」、調査 2「雇用不安が低学年学生の CDMSE を低下させるのか」、そして、調査 3「低学年女子学生の CDMSE は、低学年男子学生の CDMSE と比較して高いのか」について確認する。本稿の範囲ではないが、今後、コロナ禍における大学生低学年に対する職業教育や支援について考えるうえにおいても、これら 3つを確認することは意義があろう。

2. 方法

調査 1 から 3 を確かめるために、東北地方にある私立 A 大学の 1, 2 年生の日本人学生を対象にした、2 回の質問紙調査(パネル調査)を実施した。

調査 1 回目(以下、1 回目)は、2020 年 9 月に、社会科学系学部にも所属する学生を対象に開講された講義 a(履修者数 104 名; 2 年生 96 名, 3 年生 3 名, 4 年生 5 名)と、看護学系学部にも所属する学生を対象に開講された講義 b(履修者数 94 名; 1

年生 94 名)のそれぞれ第 1 講に実施した。講義 a を履修した 3 年生 3 名と 4 年生 5 名については調査対象から外した。

調査 2 回目(以下、2 回目)は、講義 a と b の最終講である第 15 講(2021 年 1 月)に実施し、4 か月間のコロナ禍が低学年学生の CDMSE に及ぼす影響について調査した。

なお、1・2 回目の参加者に、質問紙の回答と成績とは無関係であることを説明し、任意で回答してもらった。1・2 回目の質問紙の内容については次の通りである。

2.1 調査 1 回目

参加者の CDMSE の測定には、浦上⁷⁾の 1 因子構造の CDMSE 尺度を用いた(表 1)。この尺度は Taylor & Betz¹⁾が開発した CDMSE 尺度を基に、日本の文化を考慮し開発された。「もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること」「自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと」「就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること」「自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと」などの 30 項目で構成されている。4 件法(1 点「全く自信がない場合」~4 点「非常に自信がある場合」)で回答を求め、その合計得点を CDMSE 得点とした($range = 30 \sim 120$)。

以下の 2 つが、この浦上の尺度を用いた理由である。第 1 に、この得点が高かった者ほど、進路選択行動を積極的に行うことが確認されていることである¹³⁾。第 2 に、この尺度は高い信頼性を有しており、内容的妥当性、構成概念妥当性に関しても十分な水準に達していることが確認されているからである⁸⁾。

次に、調査 1 と調査 2 を検証するための質問項目「コロナ禍で、今後しばらく企業や病院等の求人数が減少するのではないかと不安である」を作成し、4 件法(「1.全くあてはまらない」「2.あまりあてはまらない」「3.ややあてはまる」「4.とてもあてはまる」)で回答してもらった。「1.全くあてはまらない」「2.あまりあてはまらない」を回答した者を「非不安群」とし、「3.ややあてはまる」「4.とて

表 1 進路選択セルフ・エフィカシー尺度

| | |
|-----|---|
| 1. | 自分の能力を正確に評価すること。 |
| 2. | 自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること。 |
| 3. | 一度進路を決定したならば、「正しかったのだろうか」と悩まないこと。 |
| 4. | 5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること。 |
| 5. | もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること。 |
| 6. | 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること。 |
| 7. | 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと。 |
| 8. | 何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合、それに対処すること。 |
| 9. | 将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること。 |
| 10. | 本当に好きな職業に進むために、両親と話し合いをすること。 |
| 11. | 自分の理想の仕事を思い浮かべること。 |
| 12. | ある職業についている人々の年間所得について知ること。 |
| 13. | 就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること。 |
| 14. | 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。 |
| 15. | 欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること。 |
| 16. | 自分の才能を、最も生かせると思う職業的分野を決めること。 |
| 17. | 自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと。 |
| 18. | 現在考えているいくつかの職業のなかから、一つの職業に絞り込むこと。 |
| 19. | 自分の将来の目標と、アルバイトなどでの経験を関連させて考えること。 |
| 20. | 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること。 |
| 21. | いくつかの職業に、興味を持っていること。 |
| 22. | 今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと。 |
| 23. | 自分の将来設計にあった職業を探すこと。 |
| 24. | 就職時の面接でうまく対応すること。 |
| 25. | 学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること。 |
| 26. | 将来どのような生活をしたいか、はっきりとさせること。 |
| 27. | 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。 |
| 28. | 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと。 |
| 29. | 卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要なのかどうか決定すること。 |
| 30. | 望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと。 |

(出所) 浦上 (1995) ⁷⁾, p.119.

表 2 進路選択セルフ・エフィカシー得点の平均値・標準偏差

| | | 1回目 | | 2回目 | | | |
|---------------------|------|-------|-------|----------------|------|-------|-------|
| 社会科学系学部 (n = 63) | 平均値 | 76.56 | 78.44 | | | | |
| | 標準偏差 | 13.38 | 14.36 | | | | |
| 看護系学部 (n = 31) | 平均値 | 82.35 | 86.87 | | | | |
| | 標準偏差 | 14.73 | 15.16 | | | | |
| | | 1回目 | | 2回目 | | | |
| 不安群 (n = 71) | 平均値 | 79.10 | 80.58 | 女性 (n = 45) | 平均値 | 77.87 | 82.78 |
| | 標準偏差 | 11.77 | 13.83 | | 標準偏差 | 15.69 | 15.63 |
| 非不安群 (n = 23) | 平均値 | 76.52 | 83.22 | 男性 (n = 49) | 平均値 | 79.02 | 79.80 |
| | 標準偏差 | 19.64 | 18.63 | | 標準偏差 | 12.45 | 14.57 |

もあてはまる」を回答した者を「不安群」とした。 どちらか一方に「○印」をつけてもらった。

そして、調査 3 を確認するために、質問項目「性別をお聞かせください」を用意し、男性か女性の

2.2 調査 2 回目

調査 1 から 3 を確かめるために 2 回目の質問紙調査を実施し、前述の浦上の尺度を用いて参加者の CDMSE を測定した。

2.3 分析方法

調査 1 から 3 を検証する方法として、CDMSE 得点を従属変数にした、次の 2×2 の 2 要因混合計画の分散分析（以下、分散分析）を実施する。まず、調査 1・2 を確かめるために、時期（1 回目、2 回目）を被験者内要因、群（不安群、非不安群）を被験者間要因とする分散分析を行い、交互作用を確認する。次いで、多重比較（Bonferroni 法）を実施する。

そして、調査 3 を確かめるために、時期（1 回目、2 回目）を被験者内要因、性別（女子学生、男子学生）を被験者間要因とする分散分析を行い、交互作用を確認し、多重比較（Bonferroni 法）を行う。

3. 結果

参加者は、看護学系の学生 31 名（平均年齢 18.63 歳、標準偏差 0.49；女子学生 29 名、男子学生 2 名）、社会科学系の学生 63 名（平均年齢 19.80 歳、標準偏差 0.58；女子学生 16 名、男子学生 47 名）であった^{注6)}。

表 2 に、CDMSE 得点の平均値・標準偏差を示す。CDMSE 尺度の Cronbach の α 係数について、1 回目 0.93、2 回目 0.94 であった。同尺度は十分な内的整合性を有すると考えられる。

社会科学系学部 に所属する学生の 1 回目の CDMSE 得点の平均値 (76.56) と、看護学系学部の 1 回目の CDMSE 得点の平均値 (82.35) との間に統計的有意な差があるのかについて確認するために、 t 検定を実施した。結果 ($F = 1.72, n.s.$; Student's t 検定), 有意差は見られなかった ($t(92) = 1.91, n.s.$)。

表 2 に示したように、社会科学系学部の学生の CDMSE 得点の平均値は、1 回目と 2 回目を比較すると、1.88 点高まっている。看護学系学部の学生については、4.52 点高まっている。後者の学生の CDMSE 得点は、前者の学生よりも上昇したのか

を確かめるために、時期（1 回目、2 回目）を被験者内要因、学部（社会科学系学部、看護学系学部）を被験者間要因とする分散分析を行った。その結果 (表 3), 学部の主効果 ($F(1,92) = 5.93, p < 0.05$, 偏 $\eta^2 = 0.06$), および時期の主効果 ($F(1, 92) = 8.42, p < 0.05$, 偏 $\eta^2 = 0.06$) が有意であったが、交互作用は有意ではなかった ($F(1,92) = 1.42, n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.02$)。交互作用が有意ではなかったことにより、看護学系学部の学生の CDMSE 得点が、社会科学系学部の CDMSE 得点よりも上昇したとは言えない。

表 3 社会科学系学部と看護系学部を被験者間要因とした分散分析の結果

| | df | MS | F | 偏 η^2 |
|------------|-------|---------|---------|------------|
| 被験者間要因 | | | | |
| 学部：A | 1.00 | 2102.32 | 5.93 * | 0.06 |
| 誤差：S (A) | 92.00 | 354.54 | | |
| 被験者内要因 | | | | |
| 1・2回目：B | 1.00 | 426.17 | 8.42 ** | 0.08 |
| 交互作用：A×B | 1.00 | 71.70 | 1.42 | 0.02 |
| 誤差：B×S (A) | 92.00 | 50.61 | | |

注) ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

「コロナ禍で、今後しばらく企業や病院等の求人数が減少するのではないかと不安である」という質問に対し、社会科学系学部 に所属する学生においては、10 名（「全くあてはまらない」3 名、「あまりあてはまらない」7 名）が不安を感じていないと回答しており、59 名（「ややあてはまる」25 名、「とてもあてはまる」34 名）が不安を感じていると回答している。1 変量の X^2 検定の結果、不安を感じている者の方が、不安を感じていない者よりも統計的有意に多かった ($X^2 = 24.51, df = 1, p < 0.001$)。

一方、看護系学部 に所属する学生においては、16 名（「全くあてはまらない」6 名、「あまりあてはまらない」10 名）が不安を感じていないと回答し、17 名（「ややあてはまる」13 名、「とてもあてはまる」4 名）が不安を感じていると回答している。1 変量の X^2 検定の結果、社会科学系学部の学生のように、不安を感じている者の方が、不安を感じていない者よりも統計的に有意に多いという

結果には至らなかった ($X^2 = 0.03$, $df = 1$, $n.s.$)。

調査 1 と調査 2 を確かめるために、時期 (1 回目, 2 回目) を被験者内要因、群 (不安群, 非不安群) を被験者間要因とする分散分析を行った。分散分析の結果 (表 4), 交互作用は有意であった ($F(1,92) = 4.84$, $p < 0.05$, 偏 $\eta^2 = 0.05$)。時期の主効果も有意であった ($F(1,92) = 11.89$, $p < 0.01$, 偏 $\eta^2 = 0.11$)。被験者間効果の検定だが、群の主効果は有意ではなかった ($F(1,92) = 0.00$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.00$)。

表 4 不安群と非不安群を被験者間要因とした分散分析の結果

| | df | MS | F | 偏 η^2 |
|--------------|-------|--------|----------|------------|
| 被験者間要因 | | | | |
| 群 : A | 1.00 | 0.04 | 0.00 | 0.00 |
| 誤差 : S (A) | 92.00 | 377.39 | | |
| 被験者内要因 | | | | |
| 1・2回目 : B | 1.00 | 580.44 | 11.89 ** | 0.11 |
| 交互作用 : A×B | 1.00 | 236.39 | 4.84 * | 0.05 |
| 誤差 : B×S (A) | 92.00 | 48.82 | | |

注) ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。まず、被験者間の単純主効果は、1 回目, 2 回目の平均値の差の多重比較検定の結果 (Bonferroni 法), ①1 回目: 「不安群」と「非不安群」の平均値に有意差なし, ②2 回目: 「不安群」と「非不安群」の平均値に有意差なしであった。1 回目における群の単純主効果は, $F(1,92) = 0.58$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.006$, であった。2 回目における性別の単純主効果は, $F(1,92) = 0.53$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.006$, であった。

そして、被験者内の単純主効果は、各群における 1 回目・2 回目の平均値の多重比較検定の結果 (Bonferroni 法), ①「不安群」における 1 回目・2 回目の平均値に有意差なし, ②「非不安群」における 1 回目・2 回目の平均値に有意差あり ($p < 0.01$), であった。「不安群」における 1 回目・2 回目の単純主効果は, $F(1,92) = 1.59$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.02$, 「非不安群」における 1 回目・2 回目の単純主効果は, $F(1,92) = 10.56$, $p < 0.01$, 偏 $\eta^2 = 0.10$, であった。

図 1 に、「不安群」と「非不安群」の CDMSE 得

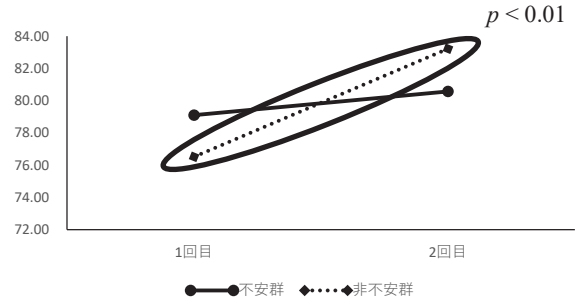


図 1 「不安群」と「非不安群」の進路選択セルフ・エフィカシー得点の変化 (Bonferroni 法)

点の変化を示す。

調査 3 を確かめるために、時期 (1 回目, 2 回目) を被験者内要因、性別 (女子学生, 男子学生) を被験者間要因とする分散分析を行った。分散分析の結果 (表 5), 交互作用は有意であった ($F(1,92) = 4.08$, $p < 0.05$, 偏 $\eta^2 = 0.04$)。時期の主効果も有意であった ($F(1,92) = 7.71$, $p < 0.01$, 偏 $\eta^2 = 0.08$)。

表 5 女子学生と男子学生を被験者間要因とした分散分析の結果

| | df | MS | F | 偏 η^2 |
|--------------|-------|--------|---------|------------|
| 被験者間要因 | | | | |
| 性別 : A | 1.00 | 39.20 | 0.10 | 0.001 |
| 誤差 : S (A) | 92.00 | 376.97 | | |
| 被験者内要因 | | | | |
| 1・2回目 : B | 1.00 | 379.28 | 7.71 ** | 0.08 |
| 交互作用 : A×B | 1.00 | 200.60 | 4.08 * | 0.04 |
| 誤差 : B×S (A) | 92.00 | 49.21 | | |

注) ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

被験者間効果の検定は、性別の主効果は有意ではなかった ($F(1,92) = 0.10$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.001$)。

交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。まず、被験者間の単純主効果は、1・2 回目の性別間の平均値の差の多重比較検定の結果 (Bonferroni 法), ①1 回目: 「女子学生」と「男子学生」の CDMSE 得点の平均値に有意差なし, ②2 回目: 「女子学生」と「男子学生」の CDMSE 得点の平均値に有意差なしであった。1 回目における性別の単純主効果は, $F(1,92) = 0.16$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.002$, であった。2 回目における性別の単純主効果は, $F(1,92) = 0.92$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.01$, であ

った。

そして、被験者内の単純主効果は、性別における 1・2 回目の平均値の多重比較検定の結果 (Bonferroni 法), ①「女子学生」における 1・2 回目の平均値に有意差あり ($p < 0.01$), ②「男子学生」における 1・2 回目の平均値に有意差なし, であった。「女子学生」における 1・2 回目の単純主効果は, $F(1,92) = 11.03$, $p < 0.01$, 偏 $\eta^2 = 0.11$, 「男子学生」における 1・2 回目の単純主効果は, $F(1,92) = 0.30$, $n.s.$, 偏 $\eta^2 = 0.003$, であった。図 2 に, 「女子学生」と「男子学生」の CDMSE 得点の変化を示す。

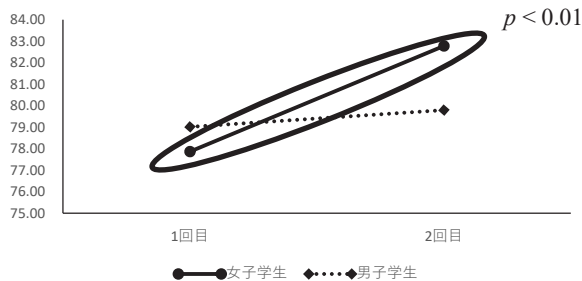


図 2 女子学生と男子学生の進路セルフ・エフィカシー得点の変化 (Bonferroni 法)

4. 考察

4.1 雇用不安と進路選択セルフ・エフィカシー

まず, 調査 2 の確認について, 非不安群のサンプルサイズが小さいという問題はあるが, 表 4 と図 1 より, 非不安群の CDMSE 得点については統計的に有意に高まっていた。だが, 不安群の CDMSE 得点は 1・2 回目の間で有意差はみられなかった。つまり, 本調査では, 雇用不安は低学年学生の CDMSE を低下させる要因ではなく, 向上を妨げる要因になることが示された。

次に, 調査 1 についてだが, 図 1 より, 1・2 回目共に, 雇用不安を感じている低学年学生の CDMSE 得点(不安群)と, 雇用不安を感じていない者の CDMSE 得点(非不安群)との間に有意差はみられなかった。

1 回目の不安群の学生は, 雇用不安を感じていた。しかし, 一方では無意識的に『自分の就職活

動時には新型コロナ発生状況は良くなり, 雇用状況は改善されるだろう』と楽観視もしていたのかもしれない。そのため, 雇用不安を感じている低学年学生の CDMSE 得点と, 雇用不安を感じていない者の CDMSE 得点との間に有意差はみられなかったのかもしれない。今後の課題とする。

雇用不安が低学年学生の CDMSE に負の影響をもたらさなかった理由についてだが, 大学 3, 4 年生と, 低学年学生とでは進路選択への切迫感は異なると考えられることが, このような結果になったと推測される。具体的に述べると, 低学年学生より切迫感の強い 3, 4 年生においては, 雇用不安が CDMSE を下げる要因になる。しかし, 高学年より切迫感の弱い低学年学生においては, 雇用不安は CDMSE 向上を阻害する要因となるのかもしれない。今後の課題としたい。

4.2 女子学生の進路選択セルフ・エフィカシー

表 5 と, 図 2 より, 2 回目の低学年女子学生の CDMSE 得点のみ, 1 回目の CDMSE 得点と比較し, 有意に高まっている。しかしながら, 図 2 をみると, 1・2 回目共に, 低学年女子学生の CDMSE 得点と, 低学年男子学生の CDMSE 得点との間に統計的に有意差はみられなかった。

低学年女子学生の 2 回目の CDMSE 得点のみ, 1 回目の CDMSE 得点に比べて高まっていた理由については, 前述したように, 女子学生は, 男子学生よりも真面目に取り組む傾向があることが関わっていると考えられる。つまり, 低学年女子学生は雇用悪化の下でも, 自身が進路未決定にならないよう, それへの対処行動を遂行しているのではないだろうか。例えば, 「自分の興味・能力に合うと思われる職業は何か」「もし望んでいた職業に就けなかった場合, どのようにして対処すればいいのか」などの問いについての回答を導く行動を既に遂行していることが推測される。結果, 低学年女子学生は, 低学年男子学生よりも, 複数の回答を導いた状態なのかもしれない (遂行行動の達成)。

しかしながら, 学部を被験者間要因とする分散分析を行った結果, 交互作用は有意ではなかった

ものの (表 3), 雇用不安に関する X^2 検定の結果が, 社会科学系学部と看護系学部の学生とで対照的となっている。本調査対象者の女子学生の約 64%は看護系学部の学生であることも踏まえると, その理由は性差だけにあるのではないのかもしれない (例えば, 学部・専門性の違い)。今後の課題とする。

4.3 本調査のまとめ

本調査で示されたことは次の 2 点である。第 1 に, COVID-19 によってもたらされた雇用不安は, 大学生低学年の CDMSE 向上を阻害する要因となっていることが示された。

第 2 に, COVID-19 パンデミックによってもたらされた雇用状況の悪化の下でも, 大学生低学年の女子学生の CDMSE は高まっていることが示唆された。

注

- 1) 例えば, 株式会社 JTB や株式会社日本旅行, 九州旅客鉄道株式会社では, 2022 年新卒採用を見送ることを発表している。
山陽新聞ホームページ, アップデート日: 2021 年 3 月 2 日,
https://www.sanyonews.jp/article/1104922?rct=prime_side, (最終アクセス日: 2022 年 1 月 27 日)。
- 2) 山陽新聞朝刊, 2021 年 4 月 9 日, p.3.
- 3) 山陽新聞朝刊, 2020 年 8 月 7 日, p.9.
- 4) COVID-19 の影響で, 多くの大学生が進路選択に対して不安を感じていると考えられる。例えば, 実際に『緊急! 大学生・院生向けアンケート』大学生集計結果速報 (全国大学生生活協同組合連合会広報調査部, 2020) によると, 質問項目「将来や進路に対して『不安』を感じる方へ・・・『不安』はコロナ感染拡大の前後で変わりましたか?」に対し ($n = 32,739$), 42.64%の者が「(コロナ感染拡大の以前より将来や進路に対して) 不安であったが, さらに不安を感じるようになった」, 28.94%が「不安を感じるようになった」と回

答している。

全国大学生生活協同組合連合会広報調査部, 2020, 「緊急! 大学生・院生向けアンケート」大学生集計結果速報, 全国大学生協連ホームページ, アップデート日: 2020 年 5 月 19 日,
https://www.univcoop.or.jp/covid19/enquete/pdf/link_pdf02.pdf, (最終アクセス日: 2022 年 1 月 27 日)。

- 5) セルフ・エフィカシーとは, 不馴れな行動に対して「私はやればできるだろう」という自信の程度を表す概念のことである。
- 6) 参加者の平均年齢と標準偏差については, 1 回目目で得られたデータに, 2 回目のデータを加えて算出した。

参考文献

- 1) Taylor, K. M. & Betz, N. E. (1983) Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, pp.63-81.
- 2) 川瀬隆千 (2018) 「大学生における進路選択自己効力の向上要因—3 年間の継続的調査に基づく考察—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 25 巻, pp.51-62, 宮崎公立大学研究・出版委員会。
- 3) 安達智子 (2001) 「大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討—」『教育心理学研究』第 49 巻第 3 号, pp.326-336, 日本教育心理学会。
- 4) 浦上昌則 (2002) 「18 章 職業指導」, 坂野雄二・前田基成編著『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』, pp.204-217, 北大路書房。
- 5) Bandura, A. (1995) Exercise of personal and collective efficacy in changing societies. In A. Bandura (ed.) *Self-efficacy in changing societies*. pp.1-45, Cambridge University Press, United Kingdom. (本明寛・野口京子監訳『激動社会の中の自己効力』金子書房, 1997 年.)
- 6) Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, pp.191-215.

- 7) 浦上昌則 (1995) 「学生の進路選択に対する自己効力感に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科』第 42 巻, pp.115-126, 名古屋大学教育学部.
- 8) 下村英雄 (2001) 「進路選択」, 堀洋道監修・吉田富二雄編『心理測定尺度集II』, pp.333-364, サイエンス社.
- 9) 堀有喜衣 (2021) 「コロナ感染拡大が新規大卒就職に与えた影響」『日本労働研究雑誌』第 729 号, pp.74-78, 日本労働研究機構.
- 10) 池井優 (1991) 『女子学生興国論』, 共同通信社.
- 11) 濱中淳子 (2011) 「女子学生の『まじめさ』を問う」『IDE—現代の高等教育』10 月号, pp.61-65, 民主教育協会.
- 12) 杉谷祐美子 (2009) 「第 3 章 大学での学習 第 1 節 大学生の学習状況」, ベネッセ教育総合研究所 (2009) 『第 1 回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2008 年]』, pp.79-99, ベネッセ教育総合研究所ホームページ, アップデート日: 2013 年 9 月 4 日, <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3161>, (最終アクセス日: 2022 年 1 月 28 日).
- 13) 浦上昌則 (1996) 「女子短大生の職業選択過程についての研究」『教育心理学研究』第 44 巻第 2 号, pp.195-203, 日本教育心理学会.